



夜明けはもう
そこまで



奥村綾子

夜明けはもうそこまで

悪趣味だと典子は思った。なぜ私はこんなところにいるのだろうと。今日の前にある、この白いアパートの一室で、彼はきっとあの人と二人で生活している。一年前は、典子と暮らしていた部屋だ。きっと今はもう模様替えもされて典子の存在すらもあの部屋にはなかったかのようにされているんだろう。典子はぎゅっと胸をつかんだ。

その時、

「行ってきます。」

という男の人の声と同時にドアが開いた。ちらりと白いやせ細った女性の影が見えた。典子は煙草の火を消すと、彼の跡を追った。寒い2月の冬の朝だった。数歩歩いてアパートが見えなくなったところで彼が振り向いた。

「知ってたよ。君がいつも来てること。」

典子は、恥ずかしい気持ちとやるせない気持ちが交じったが、ここで謝ったら完全に彼との関係がたちぎれてしまう気がして、わざと話をそらした。

「幸せそうじゃない？」

言った途端、すごく攻撃的で嫌味な言い方だったかもしれないと典子はすぐに反省した。が、言った後で遅かった。彼の顔が少しゆがんだ。

「君には悪いと思ってる。でも、めぐみ・・・彼女がもし君を見つけたら、大変な事になるから。それに彼女は今大事な時期で、体調崩したりしてるんだ。」

分かってくれよといった、困った顔で彼は言った。典子は、典子に気遣って奥さんの事を彼女と言い換えたり、なのに、その彼女の事ばかりを話してきて、ひどく頭にきていた。がっとかみつきたい衝動だった。しかし、今は朝もやがけむる早い時間帯で、通勤や通学する人達も通っていたから、喉まできている怒りをぐくりと飲み込んで、一呼吸置いてから口を開いた。

「へえ～、そう。それは大変ね。」

どうしてこんな言い方しかできないんだろう。本当はもうどうにもすることができないのに。こんなに未練がましくしがみついている自分が情けなかった。

彼は悲しい顔をして、一瞬だけ下を向くと、また顔を上げ典子をまっすぐ見た。

「仕事があるから。」

そう言うと、くるりと背を向けコートの襟を立てると、群衆の中に消えていった。典子は追いかけることもなく、彼の後ろ姿を見送った。

典子が小城悠介と初めて出会ったのは、大学の教授室だった。典子がまだ大学に入学したばかりで、悠介は院生で教授の助手をしていた。典子の一目ぼれだった。教授と対等に話している姿を見て、一年でまだ何も分からない典子にとってそれはとても素晴らしく大人で今まで見た事のない格好良さだと感じたのだ。典子はそれまで男性と付き合った事もなければ、今まで女子校だったから男性としゃべった事もほとんどないぐらいだった。だから好きになった人に対してどうすればいいかも分からなかった。とにかく好きだと言いつづけた。デートにも誘った。慣れないパンプスと高い化粧品を買い揃えた。そして、五足目のパンプスを買ったその日の夜、やっと典子の気持ちは通じたのだった。

夢を見ているような気持ちで、彼の横顔を見続けた。朝も昼も夜もずっと一緒に居たいから、彼のアパートに転がり込んで一緒に暮らし始めた。ゴミ出しをした時近所のおばさんから、奥さんと呼ばれた事がとても嬉しかったし、一緒にスーパーに買い物に行ったり手をつないで映画を見に行ったり、そういった日常的な事がとても幸せだったのだ。典子はこんな生活がずっと永遠に続くと思っていた。

でも、なんでなんだろう。

夢は夢でしかなかったのか。短い夢を見ていたのだろうか。彼はあっという間に他の女性と結婚してしまったのだ。

「荷物をまとめて。」

と無情に言い放った彼の顔を忘れない。しばらくして、別の女性の荷物が運び込まれた。

引っ越し業者の人にてきぱきと指示している女性が見えた。見覚えのある顔だった。大学の事務員の人で、色白で声が小さくとても線の細い小柄な女性で、学生証の発行に典子も一言二言は交わっていた。

気がついたら彼の姿も院では見なくなっていた。教授に聞いたら大学を辞めた、と。

訳が分からず、いつも二人で行っていたジャズ喫茶『レコール』に呼び出して問いただした。それが一か月前だ。典子はそこで衝撃的な告白を受けた。

「彼女が妊娠している。」

と。

「院を辞めて就職した。」

と。

彼はいつも言っていたんだ。院に通って研究室で研究を続けいつか教授のようにすばらしい論文を書きたいんだと。典子は泣きながら怒鳴ったが彼は静かに

「僕には僕の考えがあって今ここに辿り着いたんだ。」

と言って、喫茶店を後にした。

それからほどなくして事態が急変したのは、彼からの一本の電話だった。彼の様子は尋常じゃなかった。めぐみが倒れていると言った。出張で仙台にいるからすぐには戻れないとも言った。典子は授業中の教室を抜け出し、迷うことなく吉祥寺駅へ向かった。何も考えなかった。勝手に体が動いていた。今は、彼を寝取った女だから、とかそんな事を言っている場合じゃない。駅からタクシーで向かい、アパートに着くと記念にとっておいた合鍵でドアを開けた。

すると彼女はいた。廊下でうつぶせになってうっすら目を開けてはいるものの、全くこっちの言葉に反応しない。典子はタクシーの運転手をお願いし、二人で担ぎすぐに病院へと向かった。女の本能というべきか、典子は玄関にかけてあったポシェットをひったくり、タクシーの中で財布の中身を全部取り出して産婦人科のカードを見つけ出すと、運転手に向かって

「大堀総合病院！急いで！」

と大声で言っていた。妊婦ならいつながあってもおかしくないように、必ず財布の中に診察券を入れているだろうと踏んだのだ。

彼が来たのはそれから3時間も経ってからだった。典子は悠介の姿が見えた途端、泣き崩れた

(なにやってるんだろう、私……。)

とめどなく涙が流れた。病院の暗い待合室で、1人とても不安だったのだ。不安で不安で逃げ出したかった。どうしてあんなに機敏に動けたのか自分でも信じられなかった。悠介の子供だからとか、自分はそんなにお人よしじゃない。じゃあどうして……？

悠介は、大きな手で典子の頭をぽんぽんと叩きながら

「有難う。本当に……。ごめん。」

と言った。暖かい匂いがした。典子はしゃくりあげながら子供のように泣いた。その後の事はあまり覚えていない。確か、一通り泣いた後、悠介に「めぐみさんに会ってあげて。」と言って、自分は家に帰ったと思う。

帰る途中、病室で悠介と彼女が手を握り合っているのを見て、典子はひどい孤独感と虚無感で心臓がドキドキしていた。そして、帰り道川に合鍵を投げ捨てたんだ。ため息をつくのと、白い息がふわっと舞った。その時初めて外はこんなにも寒いんだということに気がついた。

それから一週間経った後、平凡な日常が戻りつつあった時に彼から呼び出された。改めてお礼がしたいという事だった。典子は一旦は断ったものの、それでは気が済まないからと熱心に言われ、一回きりならという気持ちで会うことにした。

二人の思い出の場所である『レコール』で彼はブラックコーヒーを飲んで、眼鏡をかけながら新聞を読んでいた。

「小城さん。」

典子は出会った頃の呼び方で、あえてそう呼んだ。

悠介は新聞を畳み眼鏡を外すと、軽く一礼した。店員が来たので「同じものを」と典子は頼んだ。

「こないだは本当に助かったよ。君にはなんとお礼していいか……。」

「人間として当たり前的事をただけです。そんなに気にしないでください。」

典子は、悠介と別れて初めて素直な気持ちでそう言った。優しい穏やかな気持ちになっていた。悠介は典子の固い口調にちょっと寂しそうな顔をした。

「敬語なんか使わなくても。」

店員がコーヒーを持ってきた。少し間が空いて、一口飲むと典子は言った。

「私はもういいの。アパートまで行ったりしてごめんなさい。もう行かない。鍵も捨てた。どうぞ幸せに。」

そう言って典子は椅子にかけておいたコートを手を持つと席を立とうとした。その時、悠介が

「待つて。」

と声をかけた。典子が振り返ると、悠介は

「子供・・・だめだったんだ。」

と小さな声でぼつりと言った。

「・・・え？」

典子は聞き返した。聞こえていたのに、あまりに予想していない言葉だったから、思わず聞き返してしまったのだ。

「彼女、流産しちゃったんだ。大丈夫かと思ったけどだめだった。心臓・・・止まっちゃった・・・。」

最後のほうはよく聞き取れなかった。彼はきっと、ずっと泣いていたのかもしれない。

典子はどうしていいか分からなかった。耳を塞ぎたくなるような話なのに、なぜか、悪魔のささやきが聞こえていた。

(私を裏切った報いよ。)

(赤ちゃんなんてまたすぐに来るわ。)

(私を苦しめたんだから今度はあなたが苦しむ番よ。)

嫌な言葉ばかりが頭をよぎる。私はいつからこんなに性悪な女になってしまったんだろう。合鍵も捨てて部屋にも行かないって言って綺麗さっぱり忘れるつもりだったのに。

その夜、典子は悠介に抱かれていた。何か月ぶりだろう。夢にまで願った悠介との夜なのに、悠介がキスをする度に典子は心がちぎれるような息苦しさに襲われた。とても深い、宇宙の果てまで続くような悲しみだった。悠介の薬指にはプラチナの指輪が光っていた。

典子は完全に思い知らされていた。もう、ここにいる彼はあの時の彼じゃない事を。もう、別の見知らぬ男だと。

こんな事はいけない。分かっている。

典子は、一度愛した男を消化するのではなく、悠介が典子を消化し切るまで、そして終われる時が来るまで、奉仕する事に決めた。悲しいキスが優しいキスに変わるまで。

窓の外を見ると、景色一面がうっすらとオレンジ色の光で滲んでいた。

夜明けはもうそこまで来ていた。